

髄膜炎、食中毒菌が母子感染 新生児発症の恐れ

食中毒菌「カンピロバクター」による母子感染で、新生児が髄膜炎を発症したとみられる例が報告されている。関東地方に住む女性(29)は妊娠30週(8か月)ごろ、飲食店で生レバーを食べ、翌日に下痢の症状が出た。その6週間後、不正出血があり、産婦人科医院を受診。胎児の心拍を示すモニターに異常がみられ緊急帝王切開になった。生まれた男児は呼吸状態が悪く、すぐ群馬県渋川市の県立小児医療センターに搬送された。検査の結果、男児は髄膜炎と診断され、血液や髄液からは「カンピロバクター・フェタス」が見つかった。複数の抗菌薬の投与で菌は消えたが、脳性まひなどの障害が残った。

同センター新生児科の丸山憲一郎部長によると、カンピロバクター・フェタスによる新生児髄膜炎は1962年に海外で報告され、国内でも過去約20年で23例が報告されている。うち12例では母親が妊娠中に生レバーなどの生肉を食べていた。丸山部長は「大人は胃腸炎程度で済んでも、菌が血液に入って胎児に感染すると脳に重い障害を残すことがある」と警告する。

妊娠中は鉄不足による貧血を起こしやすく、鉄分を多く含むレバ

ーの摂取が勧められる。だが丸山部長は「調理法も含めた栄養指導が重要」とする。

厚生労働省の統計では、カンピロバクターによる食中毒は、国内の食中毒の中で最も多い。鶏や牛、豚が持つ菌で、生や加熱不足の鶏肉や牛レバーが主な原因食品だ。

東京都健康安全研究センターの甲斐明美・微生物部長は「少量でも感染するため制御しにくい菌だが、加熱で死滅する」と強調。予防するには、生肉などの中心部を75度以上で1分以上加熱(色が変わることが目安)、2次汚染防止のため、生肉を触った手はよく洗い、まな板や調理器具も洗浄、殺菌することが必要だ。

(2月26日付毎日新聞)

卵巣に卵子の元「幹細胞」 不妊治療応用へ期待

成人女性の卵巣に、卵子の元になる「幹細胞」が存在することを、ハーバード大学などが初めて確認した。米医学誌ネイチャー・メディシン電子版に発表される。

哺乳類の卵子幹細胞は出生前になくなり、卵子に変わる一歩手前の「卵母細胞」だけが卵巣内にあるというのが通説。卵母細胞には増殖能力がないため、卵巣内で一生涯に作られる卵子は、出生時の卵母細胞数を超えることはない

されていた。

研究チームは2004年、マウスの卵巣に卵子幹細胞があることを発見。この幹細胞に特徴的なタンパク質に着目し、22~33歳の6人の女性から提供された卵巣から、この目印を手がかりにするなどして細胞を分離した。

幹細胞を、人間やマウスの卵巣組織に移植して培養すると、卵母細胞に変化することも確認した。

(2月27日付読売新聞)

エイズ患者過去2番目の多さ

厚生労働省のエイズ動向委員会は、2011年の1年間にエイズウイルス(HIV)感染に気づかないまま発症したエイズ患者は467人で、過去2番目に多かったと発表した。

ただし最多だった2010年の469人とほぼ同数。今回は速報値のため、確定段階では最多になる可能性があるという。患者を除き、HIV感染が新たに判明した人は1019人だった。

新規の感染者・患者に占める患者の割合は31.4%で、3年連続で増加した。委員長の岩本愛吉東京大学教授は「(患者が増えている傾向は)先進国として恥づかしい。無症状のうちにHIV抗体検査を受けて感染に気づけば、薬を飲むことで発症しなくてすむ。国民は積極的に検査を受けてほしい」と

訴えた。

昨年1年間に保健所などで実施された抗体検査は約13万1000件で、2010年からわずかに増えた。

(2月27日付共同通信)

看護師国家試験 外国人合格率低迷

経済連携協定(EPA)に基づきインドネシアやフィリピンから来日した看護師候補者の国家試験合格率が低迷している問題で、厚生労働省の有識者検討会は、「日本語による国家試験の実施が必須であるとの意見が多く示された」とする報告書をまとめた。

試験を英語や母国語に翻訳して行ない、日本語能力については別途コミュニケーション試験を課す案などが検討されたが、委員からは「患者の心身状態や医師の指示を日本語で正確に理解する能力が求められる」といった慎重意見が続出。報告書では「日本語の学習支援をさらに充実させるべきだ」との注文も付けた。

2008年以降、両国からは572人の候補者が来日したが、日本語の読み書きが難しいことなどから昨年までの合格者は19人とどまっている。

(3月9日付毎日新聞)

抗がん剤前に卵子を凍結保存 治療後に妊娠成功

悪性リンパ腫にかかった女性が、抗がん剤治療前に凍結保存した卵子によって妊娠することに成功したと、加藤レディスクリニック(東京都)が発表した。

女性(35)は2006年、未婚の時に血液がんの一種の悪性リンパ腫と診断された。妊娠の可能性を残すために、翌年3月、卵子7個を同クリニックで凍結保存した。

半年間の抗がん剤治療で悪性リンパ腫は良くなり、2010年5月に結婚。自然妊娠は難しいとわかり、2011年8月、凍結していた卵子3個と夫の精子の顕微授精を行なった。1度目は流産したが、2度目の受精卵移植は妊娠が継続、現在9週に入り経過は順調という。

(3月9日付読売新聞)

ナノ微粒子 大人より乳幼児の肺に沈着

大人より乳幼児のほうが、ナノサイズ(ナノは10億分の1)の微粒子を肺の奥にとどめやすいことを、米ハーバード大学の津田陽さん(生体物理学)らが米科学アカデミー紀要に発表した。ディーゼル車の排ガスに含まれる浮遊物質の

多くがナノ粒子。

津田さんは直径20ナノメートルの放射性イリジウムの微粒子を作り、生後7日、14日、21日、35日、90日以上の子ラットに1時間吸わせ、酸素と二酸化炭素を交換する肺の組織「肺胞」に残ったナノ粒子の沈着率を調べた。その結果、肺胞ができた直後の生後21日のラット(体重70~80g)の沈着率が約5割と最も高く、生後90日以上の子ラット(体重300g)の1.5倍以上あることがわかった。肺胞はブドウの房のような形をしていて小さいほど粒子を取り込みやすくなっていたという。

(3月14日付毎日新聞)

昨年の風疹患者最多に、 今年も昨年の倍近く

国立感染症研究所は、昨年の風疹患者の報告数が371人と、全患者数を把握できるようになった2008年以降最多だったと発表した。今年も昨年同期の2倍近い勢い。妊娠初期の女性が感染すれば胎児に影響を与えかねず、厚生労働省は注意を促している。

(3月16日付朝日新聞)